●東北

正木 裕美

ポスト・コロナを迎えた2024年，東北でも聴き手の感興を引き出し，奏者と聴き手を密に繋げるような熱演が各所で繰り広げられた。

オーケストラ公演では，山形交響楽団，仙台フィルハーモニー管弦楽団ともに定期公演等のチケット完売が相次いだ。脱コロナ感を象徴するとともに，意欲的な取り組みもそれに拍車をかけている。

山響は好演ぶりと地域振興で存在感を増している。御年91歳（当時）の創立名誉指揮者 村川千秋は８月10日，十八番のシベリウスで指揮台に立った。厳しい資金繰りながら，当地に音楽文化の礎を築いた村川への謝意と賛美――ホールを埋めた聴衆による惜しみない喝采が，改めてその想いと歴史の重みを感じさせた。また長井市で2023年に初演されたニキシュのファンタジー再演（６月定期），在原泉や鏡貴之（岩手県），井上雅人（新庄市）ら東北の歌い手を起用したモーツァルトの「戴冠式ミサ」（同定期），村山市内の中学校吹奏楽部＆地元合唱団と共に奏でたユアタウンコンサート（5/26），仙台市出身の山本菜摘への委嘱作「KODAMA～谺～」の初演（９月定期）など，山響には東北の音楽文化振興の担い手としての自負もある。一方でポール・メイエ（cl・10月定期）やジュリアン・ラクリン（vn&vla・11月定期）の弾き振り他，世界の名手と山響の匠集団との饗宴も繰り広げた。２管８型を基本としながら，同時に合唱を伴う大作やオペラ（別途後述）をもこなす山響の活躍ぶりは，６年目を迎えた常任指揮者 阪哲朗の力によるところも大きい。

仙台フィルは「進」時代をテーマに，歌曲から室内楽，また管弦楽作品を巡る「名曲トラベル」や「エンターテインメント定期」など，新たな取り組みをスタートさせた。「名曲…」は，常任指揮者 高関健のベートーヴェン（4/10），４月よりゲストコンサートマスターを務める小森谷巧（vn&指揮・6/26）のモーツァルト他，いずれも多くの聴衆を集めた。開催を水曜日14時とし，新たな層を獲得している。一方の「エンターテインメント…」は公演ごとに「コードギアス」「ガンダム」などのアニメ音楽に特化し，こちらはまだまだ伸びしろがある模様。来場者の多くを占めるアニメのファン層をいかに取り込めるかが，今後の継続の鍵となるだろう。また定期公演では，梅田俊明の指揮で同フィル創立者・片岡良和の「抜頭によるコンポジション」（１月），高関の指揮で80年代の音楽総監督 芥川也寸志による「交響管弦楽のための音楽」（２月）他，昨シーズン終盤も創立50周年路線を継続。新シーズンは高関によるブルックナー第９番（５月）やエルガー「エニグマ変奏曲」（11月），太田弦のコダーイやショスタコーヴィチ５番（６月），準・メルクルを初めて迎えたメンデルスゾーン（10月）など，指揮者の解釈が冴える選曲が目を引いた。またイム・ユンチャン（p・５月）や堀米ゆず子（vn・11月）ら名手の起用も，満席の聴衆の喝采を集めている。

オペラ上演は山形における進境が著しい。十分な舞台機構を備えるやまぎん県民ホールを舞台に，山響が演奏会形式の「椿姫」（1/28 指揮＝阪），「コジ・ファン・トゥッテ」（11/10 指揮＝クレリア・カフィエーロ），「竹取物語」（12/15 指揮＝阪）と，巧演を送り出している。中でも，沼尻竜典が作曲を手がけた「竹取物語」の上演は当地のラインナップに新たな風を吹き込み，華やかな海外のオペラを「ハレ」とするならば，こちらは「ケ」であるような親近感をもたらした。指揮者とオーケストラが囃子方のようにステージ上で奏でる幽玄な演出（中村敬一）に，まるでコントのような庫持皇子（大野光星）ら求婚者たちのコミカルな歌唱，切にかぐや姫を想う翁（迎 肇聡）と媼（森季子），そして帝（西田昴平）の心情が交錯する舞台は，彼らへの惜しみない拍手から，間違いなく聴き手の心を掴んだようだ。びわ湖ホールや東京二期会など他との連携も得て，オペラに通じた阪や山響が協働するやまぎん県民ホールのオペラ上演は，開館から４年間で，着実に全国と肩を並べつつある。

山形以外では，多賀城市で多賀城の創建1300年を記念して創作オペラ「いしぶみの譜～多賀城創世記～」が初演された（11/4 多賀城市民会館 作曲・指揮＝川島素晴 演出＝志賀野桂一 仙台フィル）。内容は当地にちなんだもので，語り（伊藤哲哉）と歌唱（オクサーナ・ステパニュック他），交響曲によって，多賀城碑の記憶――古代から陸奥国府多賀城の創建を経て現代までが紡がれる。合唱へは多賀城市民も参加するなど，行政と市民，プロが一体となってオペラを創り上げた。また仙台市では，仙台オペラ協会が「こうもり」を披露した（9/15・16）。３年ぶりの東京エレクトロンホール宮城での大ホール公演に仙台フィル（指揮＝末廣誠）を招き，菅原洋平（アイゼンシュタイン）らプロとの協演で日頃の研鑽を実らせた。

音楽祭は，小山実稚恵が主宰する「こどもの夢ひろば ボレロ」（8/3・4 日立システムズホール仙台），「仙台クラシックフェスティバル（せんくら）」（10/4～6 同ホール他），「八戸イカール国際音楽祭」（8/14～19 八戸市公会堂文化ホール）等が開催された。親子向けのイベント「ボレロ」は今回で10周年を迎え，もはや小山のライフワークとなりつつある。

「せんくら」は79のホール公演が３施設８会場で行われた。牛田智大や松田華音（p）らの深淵なリサイタル，郷古廉（vn）と三浦謙司（p）による鮮やかで洒脱なデュオ，阪田知樹（p）と太田＆仙台フィルによる協奏曲ほか，ベートーヴェンの「歓喜の歌」の大団円も５年ぶりに復活するなど，最終的に延べ３万6000人の人出で賑った。

室内楽では「Music from PaToNa」シリーズ（宮城野区文化センター）が11シーズン目を迎えている。落語（語り＝六華亭遊花）と木管八重奏によるモーツァルト「フィガロの結婚」ハイライト（2/8）他，趣向を凝らしたプログラムが魅力を放つ。また「イズミノオト」（仙台銀行ホール イズミティ21 小ホール）もホールの改修が済み，本拠地で再開された。第９回「シューマン 詩人ノ恋」（7/7）では早坂卓（Br）や瀧本麻衣子（vla）ら，また第10回「百花繚乱ノ巴里」では瀧本実里（fl）や庄司雄大（Hr），仙台フィルの下路詞子（cl），西口真央（fg）他，吉岡知広（仙台フィル首席チェロ奏者）が気鋭の若手を集め，好評を博している。

このほか，リサイタルでは，2025年に開催される仙台国際音楽コンクールの関連事業２件を特筆したい。ピアノ部門審査委員長を務める野平一郎は，J・S・バッハの平均律クラヴィア曲集第１巻を中心に，ポジティフオルガン，チェンバロ，そしてピアノを弾き分け，楽器の歴史を紐解いた（3/30）。また翌日には前回コンクールの覇者，中野りな（vn）とルゥオ・ジャチン（p）がイザイの無伴奏ソナタ第３番（中野）やショパンのバラード第１番（ルゥオ）他を単独で，またシューマンのヴァイオリン・ソナタ第１番他をデュオで披露するなど，コンクール以来の進境を聴かせた。

ポスト・コロナの充実の途は書ききれない程だが，ただ１点惜しむらくは，コロナ禍でエーテボリ交響楽団の来日公演が中止（2020年）となって以来，外来オーケストラ公演とは縁遠いことか。都内に行きやすいという地理的な面もあるが，来年以降の動向を見守りたい。

正木裕美（まさき・ひろみ）

クラシック音楽専門誌「音楽の友」編集部を経て，現在，毎日クラシックナビ編集／音楽ジャーナリスト。芸術文化振興基金運営委員会音楽専門委員，文化芸術活動調査員，仙台市青年文化センター事業評価等歴任。